あり

十

歌と詞を名ごとわ

[V. 13]

PL788
.4
.G4
1654
vol. 13
copy 1
Asian
Japan
Case

2004551302

源氏廿六ヤノ三月より廿七ヤまでを

なる雨風やまず。神なりしげまうで日比になりぬ。
源ん
いとまれけびしきことかずしらず。さしかさり
さきかなしきれ有(あり)き海に心づかうしもえおぼし
なすさず。いかにせましかうりとて都にかへらんことも。
まぐこかにゆかされもなくて。人にもらされなること
こそまさしめ。稍これよりふかき山をもとめてや。
給えしなましと覚えれども。波風(なミ)にさはがされて
なんと。人のいひつたへんこと。後の世までいとかな
がろしきなどやなるべしもてんとおぼしこぐなれ
夏にもしておなじさ海なるもれくこそけ。まけ
もしこさしもとこのふくもまもなくてあけくるく

日ゝずまそへて京のうちもいとゞあばつるくゝ
くるがしこゝにはちぶらかしつるまやとこゝろばそう
あばせどうしらさし出べくもあらぬ宅のこゝぶれに
いでこちまいる人もなし二葉院よりぞおながちに
あやしき姿(すぎ)まてそはち来れるみちかひまてゞる
人なるまぞとゞるゆらんじ口くべくもあらずま
げにひちしひけべきしげのれの衰にむつましう
あばさるくも我なるがらうじけるく〳〵しにけ
こゝろのほどもしらる此(姿ノ)ふこまはあきましくを
やこちるきこゝろの氣色(けしき)にいとゞさへとづるこゝち
してあるがめやるうちなくなし

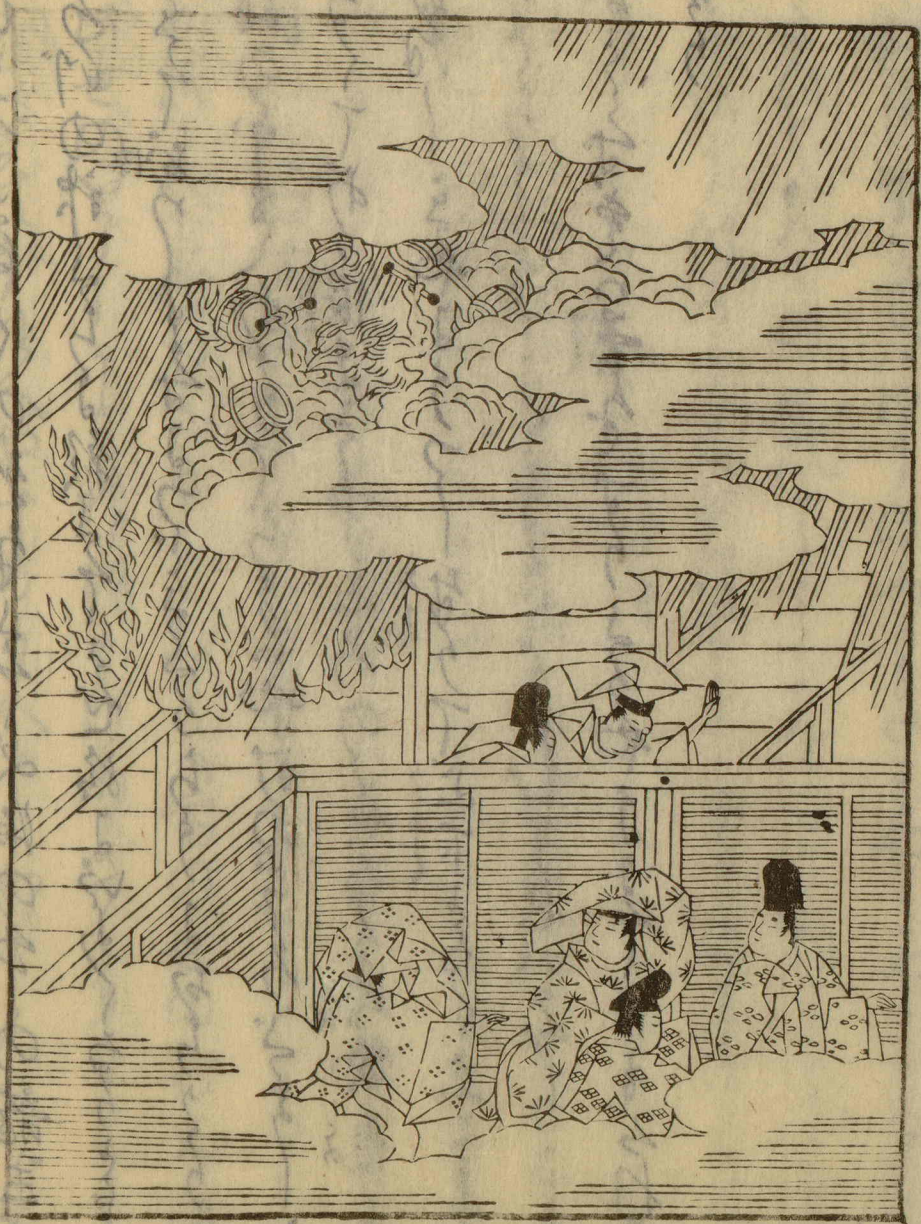
浦風（裳きうぜ）やいかに吹（ふく）らん忘ひやる袖打ぬらし
なこまなるされ。衣（あれ）はかるしきとゞもかきあつめ
ぬつり。ひ（源）きあつかりいとゞみぎハまきりぬべく
かきくらす心ち志給。京（使詞）にもこれ雨風（あめかぜ）いとあやしき
されくさとしなりとて。仁王会（まんわうゑ）などとてるいるべし
とるん望へ侍しうちに来り給上達（うんぢらめ）ア。なども。すべ
て君とぢてまつりごともこしてなん侍ならど。いかゞ
しうもあらずかくなるしうかたりなすをど。京（源ん）の
かたのことくおぼきばいぶかしうて。おまへにめし
出てとうせ給ふ。（使詞）で例の夜のなやミなくふりて。
風にときぐ吹（ふき）いでゝ日ごろになりたべるに。

例ならぬことまおどろき侍なり。いとかくぢのそこ
とはるぢうのひかりいかづちのしげまらぬことい
侍らざりきなれど。いとうじきさ海におどろきおぢ
てなるかかのいとうしきまも。心(涼ん)ぼそさ海さりける。
かくしつくよはつきぬべきまやとおぼさるくいり。
その又の日の曉(あかつき)より風いとうじう吹(ふき)塩(しほ)たりうちて。
浪(なこ)の音(をと)あらきことといたはも山も祈るまじきまも
なり。うこのなりひらめくさ海。さらにいとんうこなく
ておちかくまぬとおぼゆるにあるかぎりさりしき人
なし。我(人々詞)もいかるつこをおりしてかくかなしき
めぐこるらんちくまもあひこずかるしきめこの

ゐはをもふで志めべきことくなげく。恋(源ん)れはこころを
志げめて。ぬるまげりのあやまちまてかこれなるぎさる
命(いのち)をばさはめんと。つようおぼしなせど。いと抱さは
がしれば。安くのこてぐらさくげさをなて。すこよし
のうえちうきさうひを志げめ海まり給。海ことに所と
をこれなふ神なるらばこすけこまへと。おほく乃
犬(くゑん)敷をこて給。をのくこげからの命をぞさる抱
まて。かゝれ男のまゝちまき例(れい)ましげこの如
べきことのいうじうかるしきまこころをなうして。
すこし抱覚(おぼ)ゆり恨(うぎり)は。男をうへてこれは男ひとつを
すくひをとんとしまこて。まろこ思ま得とけ神を

念(おん)じなり。(今詞)でいひうのふりきこゑやまやしなくれ
なひて。あくのこれしこゑをぞり給しかど。ふか
きゆうけくしこゑおほやしまゐあまゐく。しげ
めりとゝもがらをしておほくうゑ給しが。今(いま)河(なま)乃
むくひまゐ。つくらよこさ海なり。波(なこ)風まゐおほ神
給ふん。天地(あめつち)ことくりなへづこなくてつこまあらり。
つきくらねをさられ家をくるれ。さくひをさりて。
明くれやすきそらなくなげきなふまゐくるしき
めぬさへこゑ。命つきなんとすりは。前の世のむくひか。
此世のをしかと。神ほとけあきらかまし海
さば。これうれへやすめなへとこゑやしろのくるま

むさてさ海ぐの鞍をさて文海の中の龍王ぐ
ろげの神さちる鞍さてさせ給はいよくなりとぐろ
さておりしますまつぐさくらうはおちかりぬ
ほのかもしあがりてらうはやけぬ。ごろごましね
なくておる恨まどふうしろのくなる大頬髮と
おぼしきやまうつしなりて上下となく立こそて
いとらうがちしくなきとよむこゑいかづちはも
おとしず。重は雲をすりさるやうまて日もくれは
なり



やうく風なをり雨のあしもあり。ほしのひかり
もこゆるゝこれおもし雨のいとめげしかなるも。
いとうたじけなくて。しんでんまゝへしうけしまゝんと
すゝるゝやけあり。こゝろもうとましげゝ。そこらの
人のふこさぐろしまどへるゝ。こゝすなどもこゝか唄
ちらしてぞり。夜をあらしてこそそとこどり
あへるゝ。君(源ん)いはゆんずしまておぼしめぐらする。
いと心あそこくし。月さして。しほのちくこちち
けり。絵もあらそゝるゝぞり。程よをかへる。浪あらきを。
朱(しぞ)の口をしかけて。詠(なが)めおかしまゝ。ちりきせかいる。
ものこゝろをしりこゝろゆくさ紀のことうち

おぼしどやうくやとくらぐ志うさとう人もなし。
おやしきなまどもなどのうちさへおいすり所とて
あけまり来りて。字も志り給ふめことだをさえづり
あへるもいとめづらかなれど。えをひもとらしず
塗灼
これ風いましがしやまざらましかば。志ほのぼりて
のこり所なからまし。かみのこすけをろかなら
ざりけりといふ。源さて給もいと心ぼそしといへば
をろかなり
源
海にますかこれこすけにかくらぶれば。ほれ
やをあひにさずらへなまし。日孫もすまいりもこ
ゆ風のさしぞるさしそいへいろうろうじ給に

それが心(法)にもあらずうちまどろみ給ひてけるさ
なまし所なれば、こゝよりぬるへるに、ご院こゝにおはし
ましくさ面なるがこゝちのてなどくあやしき所
に抱すゝぞとて、ゆゑ法さりてひきこそ給ひ、住吾(すみよし)
の神のこちびき給まくに、こゝやかなでまして、これ
うし法さりねとの給ひ、いとうれしくて、かしこき(河)
ゆかげるつれなりましこゝる、さ面ぐかそりしき
ことのこゝ給ひ給れば、今はこれなるぎさる方なや、推(すそ)
給ひましとこそこゝしまへば、いと(院河)あるまじきこと、
これはこゝいさくかなりまれくむくひそり、つれも
くしあるありし時、あやまつことなりしかど、

をのげからありしありそれがそのつゝをあふ(終)の程
いとまるくて此よばかりこぶりつれどいうじき
うれへまゝづむをこゝるゝへがたくて、うゝまいり
るぎさまのぼりいたくこうじまゝれどかく程
つゐでまゝぶいりま(そう)蓑すべきことあるまよりあん。
いそぎのぼりぬるとて立さりぬぬ(源)おぼかるしゝ
て(詞)ともまゝ来りあんとあるきいりまて、ゝ何げなん
れば人もあるくて月のかゝのこゝろくとして、
夢(ゆめ)の心ちもせず(源)けんひとまれる心ちして、(そう)雲(くも)衣(あれ)まゝれびかりどしげゆめれうちまもこまゝら
で、逆しうおぼつるきれさ夜を、ほのかなれど

さぞなまことはりつゝのこ面(おも)かげはおぼしめして戀しく
かなしく候ことあひのちつきさえんとしける候
うちとけまうけのみつるとあはれはおぼすまゝよく
ぞかくさえざるもきけつとぞ嬲(なぶり)られまし字されく
とおぼし給ふと恨(うらみ)なしむねつゝふさがりて御こゝろ
れ心はどひすぞうつのかなしさともおぼされて
ゆめもれつゝ人をいますらしこそずかりぬる
ことぶを給ふ文やこと給ふとさるはねいまし
のへどさうるはれめともおもで覚(おぼえ)ぐるはなのまゝ
るさうるちいさやかるうちをそ二三人ぞりば
ひのれやざりをさしてくおるべかんとものごんぞ

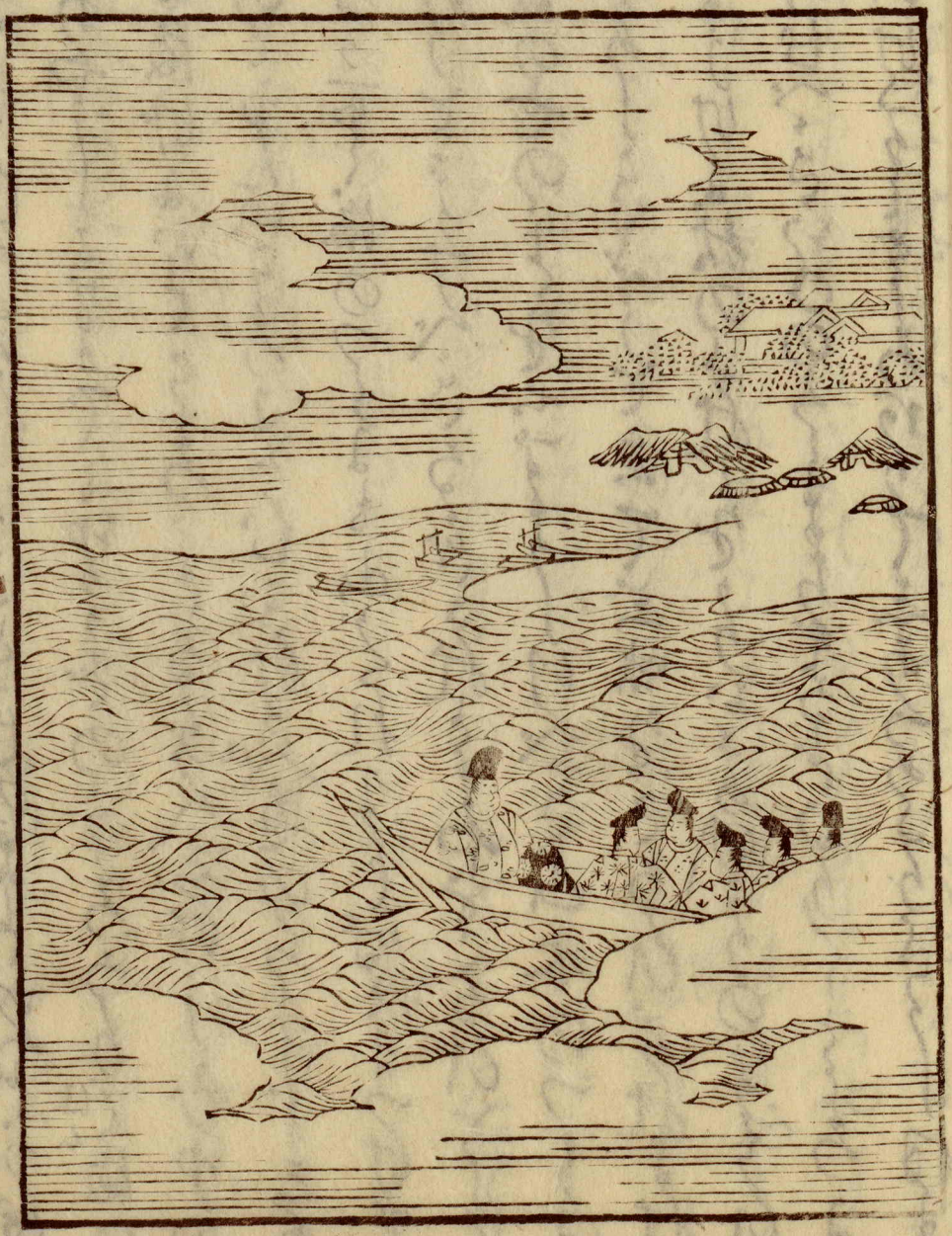
明石の浦(あうら)より、さ(播广前司入道之)のうえ、たゞぼちの、れ、ふ、ひよそひて
来れるなり。源(げん)が納云(良清之)さふらひたまひ、対面(たいめん)して、
ことの心とりやさんといふよしきよおどろきて、
入道をかれくるのとくいまて、年ごあひかたらひ
給つれど、けたくしまいさくかあひうしむること
給てゞとなるをうそうそうぼだまかはさで、ひさしう
なり給ぬる後、なすこのまゝざれまいかなることか
あらんとおぼめく。君(源)の御身なすどもおぼし
あもすることもありて、ゆや(詞)あへとのたまへば、舟(良)は
いきてあひたり。さぞうりわがしかり川の浪かぜま
いつの日まかふるでもつらんと、そろえがたくも

しんり。いぬり（入れ詞）ついたちのひの夢（ゆめ）に。さ海ことなりな
もれてつげしらすること侍しかば。しんじがくつき
ことくおもひさまへしかど。十三日にあらたるか
しるしことをん。無代よそひまうけて。必（うなず）雨風やまぢ
ばうしるよりをよと。かきねて志めすことの侍しかば。
こころこゝろふ子のよそひをまうけて侍侍しに。
いかめしき雨風いかづちのおどろかしもづりつれが。
人のみなどにも夢をしんじてこゝにをしすくり
さぶひおほう侍けりを。もちねさせ給ひぬまでも。
これいましめれひをすぐさず。これよしをつげや
侍らんとて。毎いぐし侍つるに。おやしき風ほそう

かきて、此海につき侍ること、海ことより外の志るべ
しがたぎるん、こくまもとし志ろしめすことや
侍つらんとてるん、いともたぐりおほく侍れど、この
よしやの人といふよしきる思びやうにつる人や、
ほん
君はおぼしまたする、ゆめうつゝさ海ぐ志げか
るしす、さとしのやうなることぐもを、きしうる
ゆく末おぼしあはせて、よれ人の望つる人む、後の
そしつもやすからざるべき後たぐりて海こと
の外のこすけまもあらんをそむく地ならば、又これ
より海さりて、人にうれるかめをやしん、うけての
人の心ざるる後ろし、そうるきことをもうつゝて、

我よりよそひまさりもしいろゝねたくとさまの
よを今ひとさはまさる人にはなびかさしるがひて其
心むけ我こどもべきもれなりしりぞかさてとがな
しとこそすうしのさうしさへもいひ無(をき)れげよ
うくいのちをさはめよ又なきめれ限(かぎり)をしれし
けざらまのちの何とれな我はずくとてもらけさ
こともあらじゆめれ中にもちくみかどのれを
しへありつればまゝなるまごとをかうるがたんとお
ぼしてれかへりのまふ志(深詞)らぬ世界(せかい)りめづらしさ
うれへのかぎりしつれど都のうこよりとてごとひ
をこすか人もなしらぬ東なきこの月日の

ひかりぢうりを高のともとるゞめ侍ようれし
きつりぶね候るんかれ海に志げやうにうくろふ
べきくるま侍りるんやとのおふかぶ入たぢうりなくよろ
よびかしこまりやすとともあれうくもあれ夜の
あけもてぬさきに此ふねになれとて例の志
としきかぢり宮女人ぢうりしてなりぬれいの
風いでこさてどぶやうにあかしにつきぬぬ



ちごもひ口ろ程ハかくことさのまとゆへどる紙
あやしきまでミゆるゆゑのころるり。ぞ(深ん)度の
さ度げよいところことるり。人志げうみゆる
のこるんれころよそむこさけ。入(地)道のらうじ志め
ろ而ぐ。海のつらよも山がくれよも。時ミよつけて。
けうをさりすべきるぎされとまや。をこるひをして
投の世のことを志すましけべき。山水のつらに。
いかしきぶうを立て。三味をこるひ。これよれ
まうけよ。秋のこれミをうりおさめのうりのよちひ
けむべきいひのくらまちぞるど。おりくところに
けけるミぞころおりて志あつめるり。うしほよ

おぢて、これごろむすめなどハ、さんべのやどにうつ
してすまをそれば、これも夜のうちにころやすく
おりします。舟よりハ車になりうつる時ど、日やう
くさしのぼりて、月(入れん)のうにこなるより、巻(ちひ)もつきれ
よろひのづる心ちして、急こうえて、まづ住よしの
神をかけぐおがこなる。月日の光なくまこえなり
ける心ちして、いとあるこつうまづる夏(こと)ことなり
なり。前(源ん)のさ夜をばさしらまもいたず。ひくりあしうる
こころぢへ、未立(こぶち)していし。前栽(せんざい)などの有様、えもいも
ぬ入江の水など、急ようにば、心のいうりすくあるらん
急しハ、うさをよぶまじとこそ。月ごろのれをま

ねよりはこゝよなくあさらかなるけうしは志げ
らひなどえならずして。すまねけうさ海なるど。げる
都のやんごとなきところくことなるしず。えんな
まばゆきさ海はまさりざ海まぞこゆう。すうしは心
志げまりては京のはゝこどもきゝて給。こまれりし
つゝひはいまはいこじきこゝちるむうちてかなしき
め代みうとなきさ志げこて。おれすまるとまりたう
をめしてこゝるあまれかもれどもなほく給てつゝは
すむつましきはいのりのしどもさうべき所ぐまは
此程のは有様くらしくいひつゝすべし。又(若)の家
づりまはめづらかまて。よこがへれうさ海なるどきゝて

給二条院のあはれ必しほどれ此かへりはうさもや
つと給ちずうちをさくなしのごひつゝさてし給
此氣色る代ことなりうへすくいうじきめ此恨を
ミ行くしもてつゝなりさ海なれバいまはとよ代さひ
もるるく心のミ海さり侍れどうぐこ代こてもや
のおひし面かげのもるるくよるさをうくおぼほう
るくがしやとこゝろかるしこさ海ぐのうれりし
さはさしをかれて

添 もろうまもおもひやるかれさしらざりしうら
よりをちは海づゝひして夢の中なる心ちのミ
さてざめもてぬほどいかまひがことおほかんとそ

こゝろとなくかきこゝぐりゆへ取しまぞ。いとゝ三度
ほしきそぞしめなる後いとこゝよなきれ心ざしの程
と。人ぐこゝろてまつる。を(地)のく喜(ふるさと)に心ぼそげなる
ことつて。まべかめりをやこゝまりしそれ氣を
名殘なくすこゝつゝりて。あきりすゝ何まどもほゝろ
志げなり。淡まはいと心ぼそくて。何まれいとやも
まれなりしを。人しげきいとひハ志給しかど。
こゝろ又さ度ことに衣なることおほくて。よろづに
おぼしなぐさまる。おなじ此入道をこなひ川とめしろ
さ度いうじうしすゆしろ後。こゝこれ娘(むすめ)ひとりを
まてつゞひしろかしきいとかしこつゝいつきまで

ときぐもらしうれ人字ゆ(清ん)心ちまもおりしと
きくさき給し人なれバかくおぼしなくて先ぐり
おりしるもさりべき契あるまやとおぼしなぐら
る後かうこ後志げめるほどいとこなひより和の
ことはしけじ都の人もしぐなるよりもいひしま
ぐふとおぼさんも心もづしうおぼさるれバ氣
久ぐち給ことなしことまふれてこころぞき有(ありさま)
なべてなるずもまけるれとゆうしうおぼされぬ
ましもあらずこ(入石)ゝまはりしこまりて身げかしも
おさくまいらずもれへぐつとしうしものやり
さふしぬさりはいきくれ三年ゆうまほ志り。あるぞ思

ゆえていかでおもふ心をうるへんとほとけ神を
いのくまんじこそまつる年は六十ばかりなり
なりされどいとさかげよあらまほしうなこなるひ
さしぼひて人のほどのあてたかなれがやあらん
うちひがこほ是ぐしさことはあれどいかしへの
ことをもこしつまてもれさるなりぞよしづさしろ
ともまじれくがむりしの物語などをきせて笑をふる
すうしつれぐのまぎれなりさしごろおほやけ
ほさくしれいと夜なくてさしもさく垂のつぬよれ
あるとじもくづしいでくさしもからの所をも人を
もこぞらまりしかばさうじくしくやとまでけう

ありとおぼしてこともまじかりうはなれさこしも
れどいとけるうう心もづしきれ有程は。さこそ
いひしが。何くましうなりて。けがしふことはうろの
よくはもえうち出果しぬと。心もとなう口おしと。
もくぎといひあはをてなげく。さうじこも。なし
なべての人ごとめやすきはこゝぬ世界は。よくはも
うう人もおりしかりとこなりしまつけて。月乃
程しられていとちかうまぞ出果しけり。おやうちの
りくしひあつふをさくはもなげなきことかなと
しふまゝごなるよりは抱衣なり。郎月はなり。
衣がへのれさうぞくこ。他のうるびらなどよしあり

さ海に志いげよろげにつうまつりいとなむをい（添ん）
とおしうすぐろなりとおぼせど人ざ海のおく
までさあがりたるさ海のおてなるにおぼしゆるして
三給京よりもうち志さりたるれさつしひだ。こゆゑ
なくおぼかりのどやかなるゆふづく夜に海のよく
まりなくこしつくれるもずこなれのひしふるさとの
いけ水に志まがへられのまいたんなくしひしさ
こといづるとまなくけ来なるさ心ち志のてこゝ
めれまへにこやしるくはおもちぢ鴻（きま）なるまなりおもと
なるりにたまどの給て
（添）おもとこゝろ何もちぢの鴻のあれさへ海のく海

おもとうかはもの路のおもれさ海かく海
なくしてあるよれ月ひさしうてもふれし海を思
こんなにふくろよりも出(とりぞ)ぬてゆるくかさなるし
ぬへるれさまにごとてまつる人もやすらず衰は
かるしうしあへり。廣陵(かうれう)といふてをおろかぎりひさ
すましぬへるよかれをうへの家も松のひぐきなるこの
春はあひて心ぞせあるつるさへは男はしうてしふ
べかりなるよともこさくつくまじきられもかれもれ
しぞふるひへどもすぐろもしくてお海風をひき
ゆりく入道もえらへでくやうほうらゆうていそぎ
入座詞
しまれりさしまそむこさくし世の中もしりへしし
知めべく侍る後のよるねがひ侍る前のあるさ海も

さふさまへやしなくこれさ海れとなくくめでさ
しも。ワがれころもおりくのれあそび。それ人れ
人のことふえ。もしいこ忍の出しさ海。時々は浮け
て。よまめでられなひしおりさ海。みどよりとも
じめなりて。もてうしづきあがめられなり給しな。
人のうへもワがれ力の有様もおぼしいでられて。
夢のうちし給まくまぎさなくしなへるこ忍も
ころすぐく罪ゆ。ふるべいなうぞこもと見えあへず。
とうべまびてさうのことさりまやりて。入道びし
の法しまなりて。いとおりしう見づらしうて
ひとりかさつ行いでしり。さうれれ琴まりられば。

まこしひきぬふも（入名）さ海ぐいこじうのこせひ罕し
さりいとさしも罕しめもれてひざまおりからそれは
海さりもれなるほどかぐともれてとぐこほりなき
うゑづらなるは中こ春秋の花紅葉のさりなる
よりはこぐそこちとなうしげれりけどもなる海
めりしきよくぬかのうちしてこさらるゝ氣めが門さ
してとあそれまおぼゆ（入名）孫もいとまなういづる
ことぐもほいとなつしうひきなりしるも（流）
こころとゆりてこれは（詞）女のなりしきき海まてむ
どけなくひきこうこそおりしかれとおほゆるこま
のぬふをへ君をあひなくうらゑておそ（入名詞）ばもより

なつかしきさ夜なりハいづこれか侍らん。なるまがし
延喜(えんぎ)のれてよりひきつゝへたるまと。三代(ざい)まなん
なり侍ぬる後。かうつゝなるき身まて。これよれことハ
枉(まて)ひまれ侍ぬる後。おもしきちまいぶきさなりくハ
かきなるし侍ぬる後。おやしうまゝ。ぶおもしく侍
こそぶゝんまかれ。せむひうのれまゝかひて侍れ。
山ぶしのひがんくま。松風をこさひつゝしもべるま
やあらんいかでこれ志のびてこさうしめさせてし
がなと。アメゆりまくまうらひつゝさてなるぶなき寸
べかり。恋(ほん)こと後ことしもさく給まじかるもけるか
あらりまゝ。ちさひつぎかれとてなしやつとうまふ。

あやしう世かしよりさうは女なんひきとる物なり
けるぢがのれつゝへまて女又の女さるよれしまれ
上ぜまれし給ける後もれすぢまてどりこそ
何こゝろ人なし。すべてこゝいまよりまる後と穆る
人ぞかさるでの心やまだかりまのこあるをこゝま
かうひきこめまへりけるいとけうまけることれ。
いかでかはこさくべきとの給。入名詞さうしめさんまる何の
そぐかりかも給ふん。おまへまめしてもおかさべの
中までぞまこそふることこそもやせ人は給れ。
びもなん夜ことのまゝひきしげむる人いましへも
うさう給しをおさくさぐこ得ることなうなり

りしことなどすぢことなるんいつでもかゞるなくそ
べらん。おもしろきなすこれ思ひまゝ子はゞなうも
さふかへられるゞしうらさつむりあれなげうしさ海
ござりくおもりくも待つみすゞすゞねされば。（深ん）おりしと
おぼして。さうの琴さりくへて落ちきこうげるよ
いとすゞしてかいひきこうゞまれしよる男めすゞら
ひきつけて。みづうひいといゝうつしめさゆのゝふう
うすましきうぢ世の海うする。ならごとうのかれるすゞさるよ
るやひろりんるゞごゑよさんへならこたまて。（深）我ま
時ぞひやうしどりて。ごゑうちそへなば。（入ん）公しひさ
さうつめでこきし由流るゞしあれたすゞ終へづらしこき

さ海まて氣をせ。人ぐまさけ志ねそしなどして
とのげからも此志れもしめべきよ此さ海なりいたく
かけりまゝに松かぎをとぐしうて。月も入がたに
なりまゝにすゝ海さりて。志げかなり程に浦物語
のたりなく罪をて。これ海にすゝりじめし程どれ
ころづひのちのよ代つとむかさ海かきくげし
罪をて。これむすめ此有様とたずがたりにきゝ也。
おかしきもれゝさすがに哀とさくあふかじくもあ。
いとさりやがたきことなれど我きこうおぼし
なき世界にかりまてもうつろひおりしましたりは
もし年ごろおいぼうしのいのりやたべる。神ト

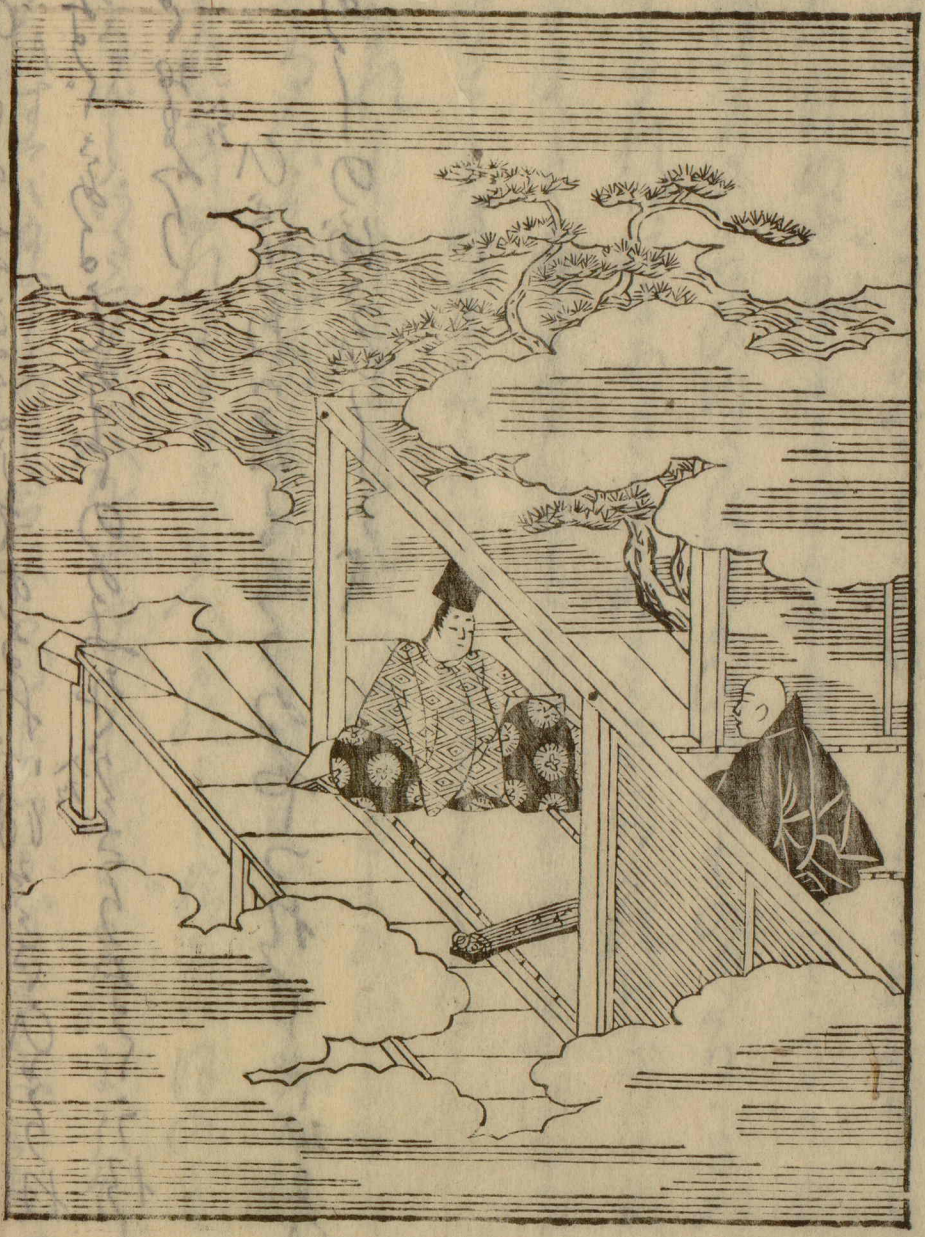
ほとけのあそれひおりしまして志げしの程御心
をもなやましなりまやとるんぞふぬふるその故は
往吉の神をこれミそじめなりて此十八年に
なり侍ぬ此れ見らいのいとさるう侍しよりぞふ心
侍りて此しごろの表秋ごとにかれこやしろに
まつることなん侍りひ家よ家の六時の川とめに
こづからのもち寸のうへのほがひをばさるまれまて
さぞこれ人をこうさほいかれへこまへとるん念じ
侍りさうされよの奬(ちざう)つさるくてこそかくくちおしき
山が川となり侍けめおやぞ人のくらねをこもち
こまへりさこゞ川からくねなりれ民(こと)となりてく

べりつぎくさのこおとりまゝらんハ何の身にか
なり侍らんとかるしくせひ侍をこれもむまれし
時よりこれむ取るん侍るハいかにして都のうちさへに
生らんとしふ心ゆゑさまより得どくにけけて
あまたのそのこをたひこれこめからきめ代み
なおりくもおほく侍れどさらにくるしこと
おもひこまへぞ命のうぎりハをげさ袖にもたぐこ
侍るんかくながらこすて侍なば海の中にもまじ
まうせねとなんおさて侍るなどすべてまのぶべくも
あらぬことぐも代うちなさくきしも君(源ん)もまれ
をこ面ぐおぼしつゞくるおりからハうちなるべ

ぐこつくこさうしめす。よこさ海のけこうにあたりて
しひかけぬ世界（せかい）にさぐよふもなるのつこにかと
なばつるくしひけるは。しよひのれものぐらりに望
あらすれば。げにあさからぬさきのよれちぐりに
こそえと衰にたすん。たまどかいかくさぐかにしひしり
給けることは。いまゝでいつげ給いざりつらん。こやこ
ちるれしときよりよれつねなさもあぢさなう。
をこなひよりれのことなくて月日をふるに。こゝろ
もこれらげぬれにかりがうへもれし給といほのさ
きながら。いたづらぐんをばゆくしきもれにこそ
はもひすてゝなふらめと。しひくむじつるは。さらばこち

びきゐふべきまこそあるれ心ぼそさひとりねの
なぐさめるもなどのゐふをうゝざりなくうれし
とはもへり

入名
ひとりねハ君もしりぬやつれぐとはもひ
あしの間さびしさぞ



ましてさし月ぶしまへはうりいぶせさ[illegible]なしは
りしせぬへとさこゝゆりけるひ。うちつるくさされ
ど。さすがまゆへなるらず。されどうしなれさん
ひとはとて

接衣うしかるしさまあしかの草の根は
夢もむすばず。とうちえぐれまへるはさ海はい
とぞあいげつきいつよしなるきはけるひなる。
かずしらぬことだ罕しけくしされど。うさしや。
ひがことぐもかきなしされだいとぐおこてり
うるくるしき。入路のてろぐへもあらはれぬべか
めり。おもつとかげぐうるひぬる心ちしてず

しうせひねうるまぎ(係)この日のひるつゝをうべる
れふこつゝしすこゝろとづしきさ海たまめるかも
中くらうもれくん海まぞ世の外なることもこもり
べりめうとこゝろづひしあてこまれくるこ色の
うこゝまえるしずひきつくろひて
(係)とりこゝろもしらぬ雲ねまるがめまびかすめし
やどの東東とぞとふぜふまいとぞうりやあるけん
入れも人しれずまちきしもとてかれ歌まきねうり
けうもしうかれいれつゝひいとまばゆきまで思い才
れくりいとひさしうちまいりてそぐのうせどむ
まめは更(さら)まきうずいとくづし げなるれふみ志

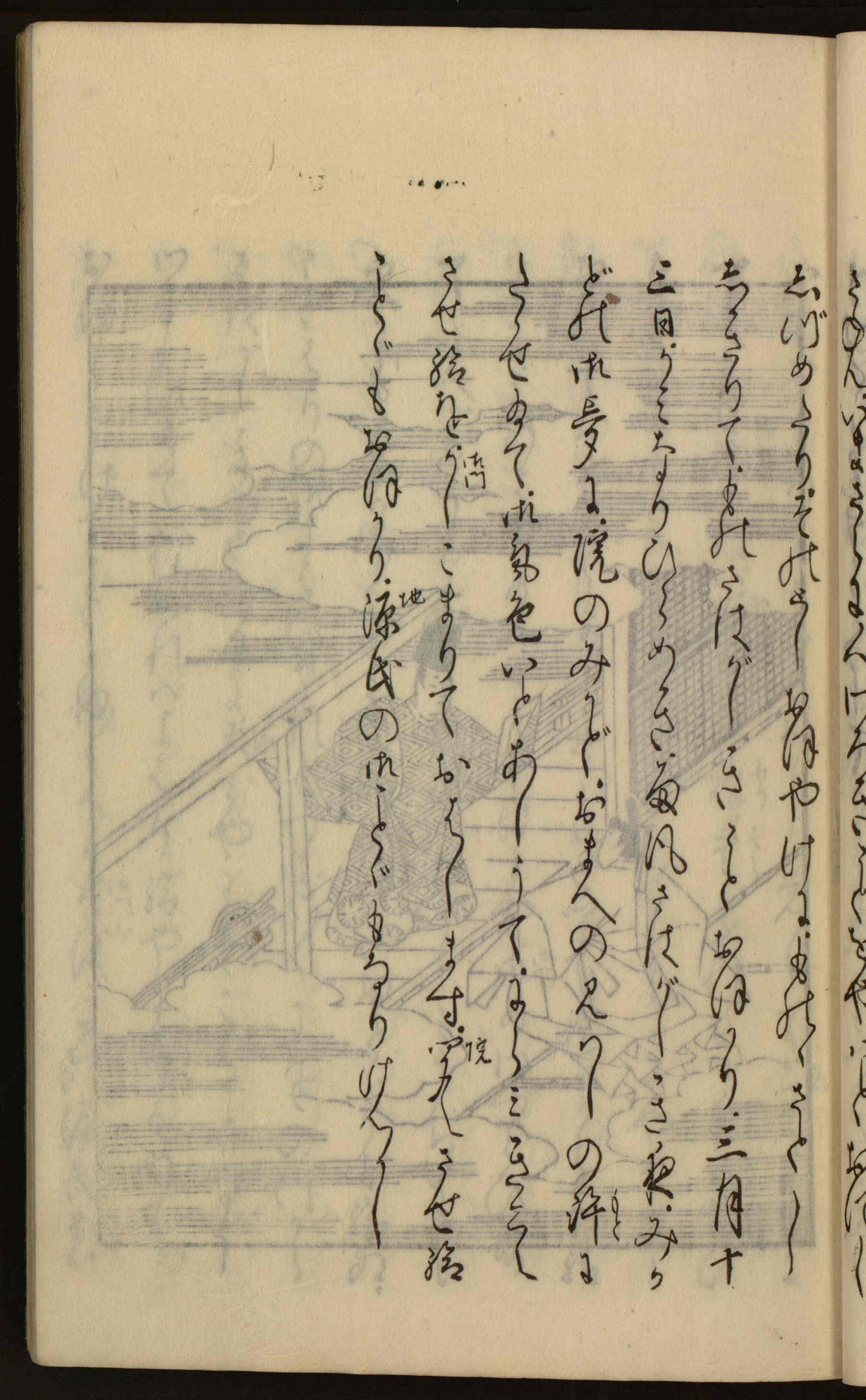
さ海よ。さし（吟石ん）いぞんもつきもたづしうつましう
人の此程つゝ身のほど。せゝまうよなくて。ゆらなし
とてよりかしぬ。いひ（入石）まびて入れぞうく。いと（冬詞）もうし
こゝきは。ゐなかびとく。侍ら女もとよ。つゝこあまり
ぬかまや。さしゝこゝゐへもとよびたべぬしこ
さまなん。さるは
なかむしんおなじ雲ゐとなかむしろハおもひも
おなじせひなかしん。となんこゝゐかいとすきぐ
しやと望しこりこちのくまがこゝ。いこうゐかめさ
これどかさざ海よしぞこゝり。げ（添ふ）よもすきこゝ
なるしめざ海しうこ給此つゝひまなべてなしぬ

ふまもなどかづけたり。源まるこの日、さんじ（文ノ詞）がきはみ
しらずなんとて
源いぶせくもうろまれなきなやむかれやらや
いかまとこふ人もあるまいひがるこゝとこれたびをい
といふうちよびたろうすやうまいとうひろし
げまかきあつり。つかさ人のめでざらんもいとあ
まりむまれいたからんめでたしといふれどあるず
らひあるぬ身の泪どのいうじうかひかなれば中こ
らるあるまれとたづねしり給まつけて泪ぐまれ
てさしる例のごうちまさ代をめていたれておきから
ぞ思めしるむしらさきれりこゝますこつきこつく

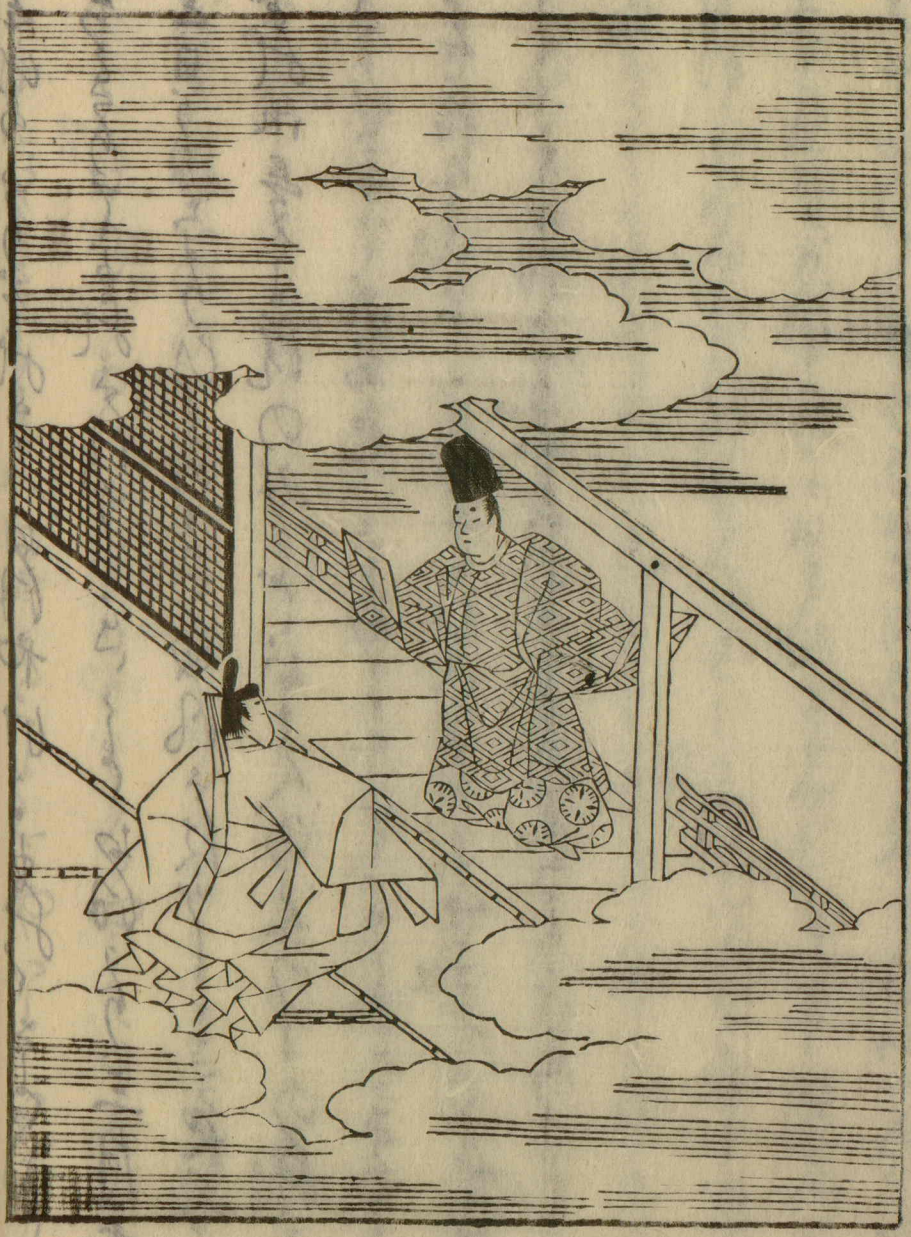
うすくまぎらはして

（明石）ちゆんろうの程やくよいうまぎこゑ人の
里かたすやまんでのき海うきこうき海ちまどやんごと
ちうさひとよいうをとうまじうどぜめきさり
（深く）家のことおぼしておりしとこゑへどうちちさりて
つくしさむも人めつくましそれば二三日へぞていく。
つれぐちうの書ましそれ哀なる明ぼのちまど
やうにまぎらりしておりくひともおちまじ心に
こしまぬべきほどさしたりてうきうくし給に
まげちうしぞうろつくおもひおぼりこう気色も。
こそいやまじとおぼしそれうよしきよからう

ぶていひし気色もめざ海志う。年ごろ心づけて
あらんなどめれまへにおもひたぶてんもいとおしう。
おぼしめぐらされて。人すくこゝ氣らばさら方まても
海ぎらしてんとおぼせど。如(昭)いたぐ中こやんごと
ろ紀きいの人よりもいたうせひあがりて。孫こげる
もてなし。罕しられば心ろ人にてぞすぎける。家(ほん)の
しと後ぐくをさへぶりていぶよく。おぼつろく
おもひきろし給ていかるせまし。ふるふれまろも
あるれ志のびてやむ人なりてましとおぼし
まろおりくあれどさりともかくやんさしとら
さもん。いまさしまへ。けろきことをやいと。おぼし



しげめたりそれもしあはやけに、あれくさとし
しきりて、あれさはがしきことあはうり、三月十
三日、うこたまりひろめき、海風さはがしこさ夜、みか
どれは夢に、院のみかど、おまへの見りしの許に
たせあて、は気色いとあしうて、ならこしきこ
させ給ひ、清門こまりておはします、院させ給
ことにもあはうり、源氏の中ことにもたりけんし



いとおそろしういとおしと思して、[illegible]
[illegible]させ給へれば、[illegible]たまど[illegible]、[illegible]
たちしるることはさぞ侍らんかろがろしくこさやうに
おぼしおどろくまじきことと思し給へれど、[illegible]給
しまこあるをあふとこしけるや、[illegible]めづらしく
て、[illegible]給へ、[illegible]
宮はもかぎりなくきさせ給へ、[illegible]
ことわりのれよりひなれどつぎつぎはをのげら
さけがしきことあるよ、[illegible]やもそこことなう
めづらしくて、程ふればよろづ給やうなる、内より
おぼしたげくことき面ぐなり、[illegible]これ源氏君

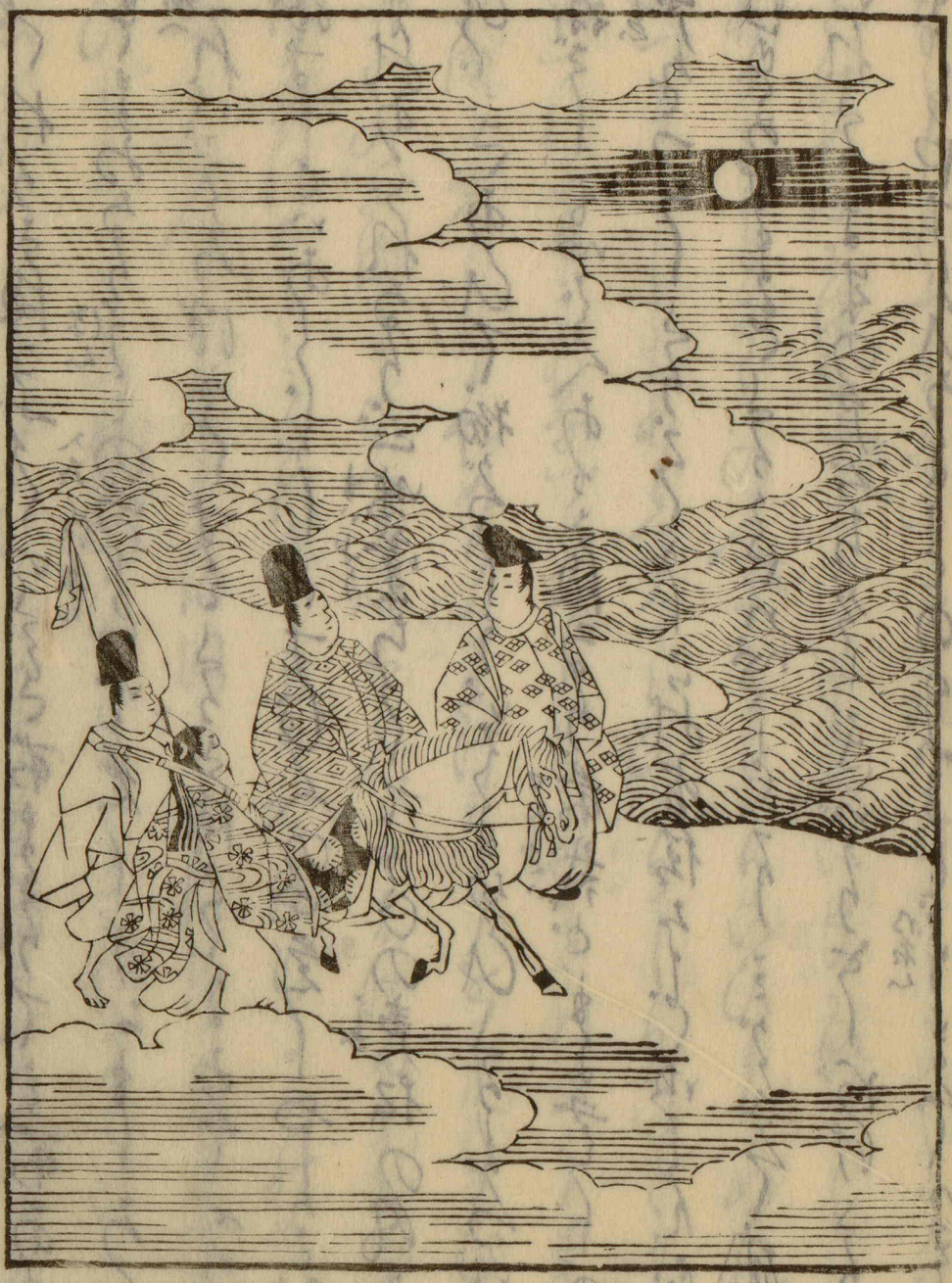
志海ことるをうすことなきまてかくしづむならば
うるしぶこれむらひありなんとなんおぼしこまふ
いまはなほもとのくらゐをもひてんとこそびく
おぼしの給を世（勅詞）のもどきうろぐしきやうぬべし
つゝるあぢて都をさりし人を三とせをぐるすぐ
さ寸ゆかされんことよこれ人もいかぐいひつゝ人侍
らむなど若（さ汚き）くこういさめ給ふおぼし（清）とくかな
ほどる月日かさなりてれなやこどもさ海ぐる
をもりまさしせのふおりしまハ例のあきハも海
ほのことなるるよひ（源）どりねもまめやうるもれまび
さりて八月にもありくうしらせ給おしうう（源詞）

まぎらいしてごろ来せよとの給てけるり給ハ
んことをばおろまじうおぼしたる成（御名ん）ざうしじこゝろ
さしまさひたりべくもあしずいとくちあしき
きいのゐるがべこそがりまくぶりたる人のうちと
けごとまつきてさやうまかろうまかろふま
ざ成もそなれ人かずまもおぼされざらん事也
我ハいらじきまれさひをやそへんがくをとびなき
心をさへるおやこちもよごもりてすぐして年月
しておひちぶのうまり来ろろまくてさつらめ
中こなる心をやつくさんとさひてこゝじ此うしま
おはさんほどうろれ文ぐりをきてしかはさむ

こそとろかるゝれ年比者にのこ罪て、いつ所さる
人の所ありさ所を得のうまもこなしんなどそろ
かるおもひこそしをうくおもひかけざりし
所をも御ねまてまほるゝれど得のうまもこなり、かる
なるさ物とこさてつゝへし所ことの○をも所につけて
こそ、おけくれの所官様おぼつるゝしでうくまで
よるあるものとおぼしらぬるなどこそ、かる
所まれ中にくちぬるこるあまることもなれなど、
おもふるいよくたづしうて、つゆもけぢかき
ことはしひよしず、おやこちはうくらのとしごろ乃
かりのかるゝべき所おもひるがら、ゆくりかるこせ

なりて、おぼしかずまへざしんとき、いかるるなけき
とうきんとせひやるるゆくしらてめでしきへと
きこゆとも、つくういうじうもあるべきこれめり
こゝぬほとけ神をこのこなりて、人の心をも
すくせをもしてるどうちかへしせひこゞれたり。
君ハこれごろのなこの者まかれもれてもときゝ
ぐやさしずいかひなくこそなどつまいの給ひて、
会よろしき日こきてたくて君のごくせひけづふを
きくいれど弟子ごもるどましきず心ひとつま
しちぬかくやくぐらりしつひて十三日の月乃
暮やかまさしむしろまとてあしてこれと笑しろ。

係
恵いすきのき海やとおぼきどれる紙しまりひき
つくろひて来ゐしていで給れ車ものまくに
くりこれど前きしとて此馬にて出給これこれ
などだらをさふらはせ給やくことをくいる所女なり
こちの御どもよりも此海にこけるしまて世ふどち
こまほしきいりえの月かげにもまづこひしき
雲
人のれこと紙をひ出きてしまるにやがてむまひき
すぎてどもむきめべくおぼせ
係
秋の来のつきげの弱(こま)にけがこふらくもゐる
かれ時のまもこんどおひたりごろれ給



つくれるさ海こぶくいたさ前まさりてこゝ前あり
もまねるり。うこのつらいいかゝしうおましろく。
これいころぼそくすこころさ海こくまねてもひ
おすこといあらじかしとすむ人の心見しやうまま
まれあくれるり。ご味堂ちくてかの声松の風ま
ひごさあひて物がるしういたまあひこうまつれ
孫ざしも心ぞんあるさ海るり。前栽どまま世しの
声をつくしたり。こくかしこれ有様なぞ作らんぞ。
むもとめすまをこうかさは心ことなりこゝがきて。
いれこうままのやぐち。そしきゞりをしなけこり。
うしやすらひるまとのあふまをかうまでいこそ

なんじとふうせふに。もれなげうしうてうち
とけぬ心ざ海をこゝろうも人めいたるれ。さしも
あるまじきくいの人ごまがぐりいひよりぬれば
心づかうしもあらずなるひたりしを。いとかく
やつれたるにおなづらひしきやとねたう。さ海
ざ海に笑しなやめりなさけなうをしたくむも。
ことのさ海にたゞへり。心くらべにまけんとて。人
けなれなどこゝだれうしをもふさ海。げにもれさひ
しらん人にしてこを海ほしかれ。ちうき来了の
ひまにさうの程のひきなるされたるも。げたひ
しどけなくうちとけながらかき海さぐりける程

ゑしておりしかれば（源）これこそちゝしらうとも成
さへやたまどころげまのあふ
（源）むつごとをかたりあはせんひともがれうき世
の夢もなかなかじさむやと
（明石）ぬよりやがてまどへるたろまはいづれを
夢とわきてかたらん（源ん）はのかるかけそひいせのミ
やもぞ所にいとよう見しらりなまごろもなく
うちとけてねたりける成（源ノ入紀之）がうもれ見しぬまいと
わりなくてぢくりけるざうしのうちにいりて
いかでかためけるよかいとつよき成（源ん）志ねてもなし
こちら海をぬさ海なりされどさのミもいかでかは

あらん。人ざ海いとあてまそびえて。心をげかしき
けをひぞ志るかうしあかがちなりけり歌をおぼす
まもおさかしず哀なり。れころざしのちりまさるを
すなるべし。つゆはいとをしき夜のながさも。とく
明ぬる心ちすきは。人は志られじとおぼすもころ
あれたく志うて。ご海かまかたしひをきて出すひぬ
れふこいと志のびてぞ。ふはあり。あひなきれ心を
をまなりや。漫ろまもかろこといかでもらさじと
つゝみて。れつゝひことくしくしもてなさ恩を。
むねいたくおもへり。涼てのちは志のびけく時ごお
もす。ほどもすうしをなれたるまをのづからも。れ

のひさゞろまさにはまれこまやまちまじんと出し
ちどりの経をよまれはしとおもひたげさするぞげる
いかうんと入ぬも極楽のうかびをばまれうくる
さゞられ心乳色を紛鏡すや次今さへまさへろを
てうのもいらしくあしけるり二条のきされ心の
つてまゐり字絡ん〔ことに〕こまれまても心の
端てありけるとさひうやまれまんに心ぞかう
きづしう遊ばさるゝもおかぶちやうれ心ざし也
経ありしうかりてのことをだされずよろうとぞ
めでうしとのうりし科てずぞてあやうさすさひ
ぶらまつけてもさあさまされまりけんみずぞつさん

さ海はしう人の御りさ海をこゝゐふまつけてもこ
ひしされるぐさむかるなれば例よりも此ふそ
こ海やかまかさゐて。おくに。まつしとや秋なるがら
心よりかなるなるぞりごとまて。うとまれなりし
ゆしぐをさひ出るさへむ。いたさに。まるあやしう
もれたるなき事をしてこ侍しが。かう罪ゆるとゆず
がたりにぺぐてなるき心のほどはおぼしあらせよ。
ちかひしこともなどかきて。御覧よつけても
源 しほぐとまげそなるなりそめれみな
めは御まれすさひなれどもとあるは。此かへりなりなり
ごろなるくらうしげるかきて。文句しのびかるる

此夢がたりまつけてもおもひあはせらるゝこ
とおほかるる

笠 うらなくもしひけるれちぎりしをまつ
よりあるはこえじもれぞとおひしかるる柏から
こゞおしぎかすめぬつる夜いと（源ん）衰まうち出がたく
こゝのておぼりひさしう思びの（さび）接ひもし給ふぞ
女（ゆ名ん）しもしるさまいまぞ向ことは身もなげ
いべき心ぢする。いまこゝかげなるおやぞりを
これもしきもれまていつのよ人ちまくまなる
ごき身とはしぞりしぞこゝそそいとなくて
まづしつるしは思ふまことをか心をもなやまし

けんかういうじう抱せたしきよこそ有されと
ねてなしたりおもひしよりもよろしげなり
なるしかれどなぐらりまもてなして、まくらぬ
さ海ましなり。衣（源ん）とは月日まそへておぼし
まさぐやんごとなきかたの（紫ノ）おぼつるくて、年
月をすぐし給がしぐなしすうちせひをたを給
らんがいと心ぐるしかれば、ひとりふしがちまて
ゐし給。絵（玉）をさ海ぐかきあつめて、せふことぐも成
かきつけかへりことをきくべきさ海ましなり。
らん人の心ましきめべきものくさ海とすりいかでか
そしまうふれ心なるらん。二条のきみ（紫）もかれ衣に

なぐさむかたるくおぼし給ありくおるじやうは
絵(ゑ)をかきつゝめもつゝやがてけがれ有様を日記(にっき)志
やうにかきもつりいかるるべきれ有様どもなりか
あらんどしかたりめうちまれくもりのことあ
まて世中さ海ぐにのこゝろこうぶいのこゝろ
右大臣のれむしめ義香殿(ぞうきやうでん)の女れのれけしは男みと
むまれもつるふたりにあるりもへぞいといけるし
長(ぶん)ぶめにしてはゆづり家を給はるめおほやけのれ
うしろみとし世代まつりごけべき人をおぼし
めづすいこれけんじのかくしげこゝまふこと
はとあらしうあるまじきことなれバつゐる

吾(きぶき)のれいさめ候もそむこさて。ゆりされぬべきさぶ
めむさぬ。こぞよりこ(恵)ささ候もれもれくけよりやこ
ゆひ。さ海ぐのもれくさとしさきりさはがしこさ候。
いこじきれつくさこぞをさ給さるしまや。よろさうお
けましけり。れ(汚)めれるやこさへこのぞをもくなるせ
ゆて。もれころぼそくおぼされなれば七月廿よ日の
ほどよ。又かきねて京へかへりまべき宣旨(せんじ)くだる。
つね(源ん)のことをおもひしかど。よれつねなきまつけ
てもいかるなりさけべきまかとなげき給をうう
まはかなれば。うれしきまつけても。又これうしら候。
いまもとさひとなれんことは候おぼしなげくま。入る

さうべこさしとくせひなるがしうちきくよりむすひふる
がりてあばゆれどせひのごとさうへ給はぐこそは
ひがあまひのうるふまはあしめなどあまひなるなれ。
源もころはよがれなくうたしひ給。六月ばりより心
ぐるしき氣色なりてなやこなりぐ（明石上くるいまんこ）ひれおべき
程なればおやまくなるまやありけん。なりしより
も衰まあばせておやせうしまれせべき男まもあ
けるなどあばしこぐり。如（明石）はさしまもいたず思ひ
せげこうり。いと（地）ことなりや。せひのほかまうるしき
こちまいでこち給しかど。つゐまはゆき先ぐり
きるんとかはあばしなぐさめきこれこびも

うれしきさうこのれいでこちの又やハかくりこそ
べきとおぼせる衰なりさふふ人ぞもほどくま
つけてハよろよびせ京よりもれむ人ハ人ぞ来り
心ちよげなる後おるじれ入道なるぞにくれて月も
こちあぼどさへ衰なる雲れ気色になるぞや心げから
いまも世うしもすぐろなることにて三後ちぶら
かすらんとさ面ぐにおぼしこぐろ。こころ後志れる
人ぞもおるまく例のれくせぞとくこまりむつ
かるめり月どろハつ程人にそしきこをず。時ぞ
かいまぎれなどしゐへるつれなき後。これどろあや
まくに中々の人の心づくしにとつきしろふ。お油云

しるべして罪人いでしぞじめれとなどさくめき
あへる浦ぶらぶらしずしへり。おさてぞうりまなるまて。
れいのやうまいたうもふるさでいたりしまへりさや
かまもまぐこ給ふぬかたちなどいとよしく
しうけたるさ海して。めざ海しうもなりける
れとこすてがたくくちおしうおぼさる。けるべき
さ海よしてむかへんとおぼしなりぬ。さやうまぞ
かたしひなぐさめまふ。おとこれれかたち有様ぞる
さしまもいとず。年比のれなてなひてり。いたくお
もやをかへるしもいふるなくめでしきれ有様
まてごろぐるしげるる氣色まうち泪ぐミけく。

哀にふくちぎりあつるはこぞかぎりをさいはい
まてもなどかやまぎらんとまでぞ三日れどめで
たきにしも我身のほどとせふにもつきをず地なる
のゝ忍然の風にはる後ひぐきことなり塩やくけふり
かすかにしるびきてさりあつめたる所のさ海なり
源 じたびは立別ふとをもしほやく蜆(けふり)をおふ
じかたにしるびかんどのたまへだ
昭 うきつゝめて何まれたくもれおもひにもいまも
かひなきうしにぐにをじ哀にうちなきてこと
ずくちるもれからさるべきふしのれいしへなども
あさからず罪ゆえれつるにゆしがりまふもれて

孫などさしまこさせなしざりつるはいうじう恨こ
給ざらはかるこまも志のぶぐりのひとことをざ
まとの給て京よりもておりしたりしこさんの
れことくまはつきして、そろことなる志しべな
ほのうまかきなしまへるふるさよれまめか
しまとへんすなし入道えたへでこづらさう乃
ことくまてさしいれたりこぼかうもいとぐちるこ
さへそぐのうされてさぐむごきかるなるさまさそは
なくなるべし志のひやうましくべたるほどいと
上ぎめさたり入道の文のれことのもをさぐいまれ
又なるさまれまもひきえたるはいまめしうあか

めでたきさく人の心ゆきてかたちさへしひやら
聞くことはげまいとうぎりなきれことのゐなり。こ
れはおくまでひきすまし心まくて孫たきねぞ
まきれる。これはころまぐまもじめてあれは
なつしうぎぶこくなれぬもぬてなどこころや
ましき程にひきさしつゝあらずなばさらくは
も。月げなどしぬてもきくなしさぐりつゝんと
くやしうなばさらこころのうぎりゆくされのちぎり
をのこし給。さんはまたうきあはすまでのうこと
まとのたまふ女
なまばざりにこれめをくめるひとことをつき

きぬ春(れ)まやかけて思ぞん。いふともしきさくら
ずさひなどうしこゝにて
(源あふ)多しまでのうちこゝにちぎる中のなのしらべハ
ことにかつらざらるん。これ(叩れん)はしらぬさきより
かるしずあひこんとこれこゝにあふめりされぞしらで
ワれんほどのワりなき涙おもひむをしるもいと
ことわりなりさら給あるけきハ春ふかう出給
てれむ人の人どもさはがしそれバ心(源)もそらなれ
ど人まつらひて
(源)うちすてくしけもかるしき涙なるこのなぞり
いかにとおもひや家かれ。れかへり

せしへうつよまやまあれてうきこちまとのかん
あかりしやこゝろさびしかまじしうちあさまひけります
あさる心をおふまぬ本意のびのゐへどゆろくしこぶれめ。
こゝのまつめんへどいふ心うかれさくものねちまれやこ。
さしつかゆふだうらるれこまへるをびまえく
ありさまなをおりこゝそうしみてこまあつかしこさま
なげれそろうるゝぞなばさるるありしさいまつらつず
さかられしこさるもげきりめを恨よこれちまきさ心
けりくしこてなげき哀がりてらちぐこゝゆこれのひ
おへるこやもあらされどちまよろはさてある。
へ心なふのれまつけびさいつあしうやりうまの

わり人ごとに思ひ出るまで撓(しぼ)のさしぞくめづらしき
さ海なりいけのまゝかしあへかんとこしらり。れよ
そひもいふべくもあらず。こそびけあまこうけさ
ゆきす。海ことの都のつとにしけべきれをかり物
なまど。ゆへづきてしひよしめ海なりしかふなるべ
きかりのれさしそくる
入江 より浪(なみ)よこちうきれこそ撮衣(しぼころも)しほどけし
とや人のいとこんどある代れんじつけてさい
がしかれど
源 かくこゝろぞかふべかりけるあふことの日かぎ
へざてむなる此衣をとて源行 こゝろざしあるをとて

なりかふ。此男まるれたりども後つかはす。げ(地)り
今ひとへ志のぞれなんべきことをそふかくこと
なあり。えなしぬ。此ぞ白ひのうつりたるを。いかに
人のこころまもしめざらん。へ見いまいとよ後たるれ
侍りましたるれども。かふの此をくりまつりまし
らめことなどやてかひをけくるもいとおし
ながし。けりさ人をけしひぬべし

入名 よ後うしまこしたほじむ男となりて我
此聲(きし)をえしてたるれね。心のやこはいとどまかひぬ
べく侍れば。さりぬまでぐるとゆえて。すきぐしたき
さ後なれど。おぼしいでさせなふあり侍しがるど。此

萬色終わり、かうじしあれども、おくれをとゞめて、而ぐ
うちあつくおまへるれ、またれつくらぐ、いちんくる
ちうくこし経、切もひすてぐさきすぢもおあれば今
いそしらくこゝろまさし終てんごゞはすくりてこそ捨
ぐさみれ、かりぐすくきこえて
こやこ出し妻のなげきをさとしめやらし
おうらし浅別めう秋ぞてさしのびひとかへるる
入合 いうじ地蔵しずもほされますろ。言ねもおさましう
よろばふぎうじしれうちへさとつべきくてちうくて。
たうしもへましじともひきげはれが、これうさ
さらしくまてゆうちるきこしちれどうちすてあへる

恨のやなかるゝなきる面影そひてわすれがたきる。
しけきことくはしくなるこゝにましげめりさく君も
ちぐさめまひてなまくかくろづくしなることは
せひそめけんせんべてひがくしきさひとましさがひ
けり心のなこゝりぞといふおなかまやなぼしすつ
まじきことも抱し給めれはさりともなぼまて前
あらんせひちぐさめてはゆなどをごゝ氣れおなか
ゆくしやとてかゝすゝまよりねたりめれとさく君
などひがめつゝろをいひあさきけく。いつしら
いつでせふさ後にてこまらんと。年月なこれみ
るしいまやせひかるまとしそこのこ笑つれ心

ぞうしきどもおもくじめるところなく
ちげくをとゞまもびとおしいれゞばばくられて。
ひるは日ごとひいきのこれらし夜はすくさうるは
かさしおそずゞの川来もあしらずありなからとて。
もさぶしすらてあつざおこりや弟子(でし)ぜりはあだめ
られて夜る出て行道(ぎやうだう)する我はやつしらづる
ちられつまらずしあらほされりくそばてり。
うしもつらそてちるのてやミかしらる日どもなか
れずらしあれまんぶれける

源
君はちまゝにれうとまわたりてれいへ志給て侍吉に
もこいらうて夜くの軽(ぐりん)たちしやべきうしれつゝひ
志てやさせ給織(まいり)に所をうてこづらしは此度えまうで
給ひずことゝろのれをうしえうなどなくていそぎ入
なめ二条院におりしましつきてこゝやこの人もれ
ともの人もゆめれこゝちしてゆきあひどろこび
なきもゆゝ志きまで立さはぎたり無君(法)もかひなきさ
もれにおぼしすてつゝ命嬉(いのちうれ)しうおぼさるゝんりし
源
いとうけうしげにねびとくのありてれもれしひの
ほどにとゝろせうりしれぐしのすうし風がれ
しうしもいうじうめでしき後いまはうくてとう

へさぞうしと此心あらねるまつけて いまさかれ
あらずけれし人(昭君)のせんりしさ夜心ぐるしう
おぼしやらるる後よとせなりうるまて此心の
いとまぞうるさや。その人(昭君)のことぐもるぐさえて
出ぬてり。おぼし出さる此乳色あさうらずミゆる後
(世界)ぐるらずやミなりぬつらん。けぐとるらず。ミ後が
せまずかぐほのあしぬぞおうしうらうさくせひ
アル給かけこるまぐるあぬ此さ夜をいうでへぐそつ
ふらし月ぞと。何さましこまでおもほせるさり
うへしよれ中もいとうらあしうるん。程もすくも
よれ此(宇宙)あらこまりてうずよりほうの程(ぞん)大納言は

なり給つきぐのひとも、さるべきかぎりはもとの
つきうへしたまふよりはゆるさるゝほどかれたり
しまの去にあつるこちたくて、いとめでたげや、
めしあるとて（源）うちにまゐり給おまへにさふらひ
おまへ、ひまさりていかでさるもれむひかしさ
すまゐにさしへ給つらんとこそまゐ女房などの院の
御時よりさふらひておいしらへなどもいかるし
くて、今夏（いまさら）にあるさはぎあで罪ゆ、（清門）うへまもづしう
さへおぼされて、御よそひなどことにひきつく
ろひていでおりします、御こちれいなるず日ごろ
へさせ給ふれば、いたりおとろへさせまつる御ぎのふ

なふぞをうしよろしうおぼされけれ物僧しめや
うまなりて。夜まいりぬ。十五夜の月おもしろう
しげうろうまゆのとくさらづし忘し出されて。
しばされさき給。もれ心ばそくおぼさるくなるべし。
あそびたどもをず。せうしきくしもれねなども
きうで。久しう女まけうかるとの給もすうる
源 つるげ海にしげきうしあれひるのこれあし
さくざりしさしいへまなり。ときうしうまへば。いと 法門
あられに心をづくしうおぼされて
法門 女ぞしらめぐりあひけり時しあれば別し
妻のうしとのこすか。いとなまめかしきれ有信なり。

流のれとめまれ八條をこちらへきこと。まげいそ
がせ給。悪実をこなり給ま。こしちなくおよすけさせ給
ひて。めづらしうおぼし悦ぬへる後。限なく哀とこ
とてまつり給。れざえもこしなく面さらせぬて。よ後
こまち給えんまもぐりあるまじくかしこう
こしさせぬふ。天皇のこやまもれ心すらしまげめて。
れ對面の御ぎまもあられなりことぐもあらんかし。
誠や皮明石まは。海の波まつけて。れ文つかます。ひき
うしてこまやかまうさ給めり。波のよかくいる
親つありしの浦ま鉦ぎられこつやと人を
さひやるかふれ肺のむとめれ又節あいなく

人たれぬもれおもひさめぬうこちたて・まぐな
ぎけくしをてさしをとせたり
（五節）すまれのうしに心とよきしふなべのやがて
くるをり袖をとせだや・てちどこよろくまさり
まちりとこおほをまて・つかす
（源）かくりていかごとやせましよせたりしあふ
袖のひがるかりしとあらずおかしとおほしてちど
見たれば・おどろかされまて・いとゞおほしいげ
れど・これごろいさやうのれふるまひ・さしにけくこ
ゆふめり・茶ちる里たまどまも・しゞれせうそこ斗（だう）
まて・おほつろく中こうしめしげなりとなん

せましらずもれうくくさぜ

69038
6AP78